

私の父親が、岡山県倉敷市にある玉島教会の牧師をしていた頃のことです。私の小学生時代ということになります。父はゴードン先生というカナダ人宣教師と親しくて、家族ぐるみのお付き合いをしていました。ゴードン先生の家に行くと驚きの連続で、貧しい我が家と豊かなゴードン家を、子ども心にも感じさせられました。巨大な冷蔵庫の中の巨大な牛乳ビン。肉がたっぷりの食事に美しい食器や豪華な家具。我が家の中古のカロウラに対して、ゴードン先生は大きな外車。それに舟まで所有しておられました。

子どもだった私には、牧師である父と、同じ仕事であるはずのゴードン先生との間に、どうしてこれほどの貧富の差があるのか理解できませんでした。後からわかったことは、1ドルが360円の時代であったこと、日本とカナダでは牧師に対する待遇に基本的に違いがあること、ゴードン先生は教会からではなく派遣されているカナダの教団から謝儀をもらっていたということでした。

ゴードン先生一家がカナダに帰国される時に、電気で走る高価な鉄道模型をくださって、私は夢見心地でしたが、そこにメイド・イン・ジャパンと書かれているのを見つけてショックでした。日本人が買えないような高価なおモチャを日本人が作って、カナダ人が買って日本人がそれをもらう、なんともすっきりしない気分でした。

日本の教会やキリスト教主義学校の中には、かつて外国人の献げ物によって創られたという所が少なくありません。そこには外国人宣教師の献身的な働きと、その背後にある、宣教師を送り出していた見知らぬ人々の祈りと献金があります。神さまから受けた恵みを別の形でお返ししていく、日本の見知らぬ人々につなげていく、そのような信仰と思いによる援助があったのです。

大きな経済成長を遂げたこの国で、私たちの暮らしは豊かになりましたが、そのせいで大切な何かが見えなくなってしまったとしたら、それは悲しいことです。

カナダ人のクレイグ・キールバーガーは、世界各地で児童労働や児童買春が行われている現実に対して、それをやめさせるために立ち上がりました。彼が12歳の時に知った、次のような出来事はその発端でした。

パキスタンのイクバル・マシーという少年が、両親の借金のカタとしてじゅうたん工場に売られていきました。その後マシーは人権保護団体に助けられてアメリカに渡り、自分が受けたひどい実態を証言し、そのことが報道されました。マシーが帰国して4か月後、彼は自転車に乗っているところを何者かによって銃撃され、殺害されたのです。

その記事を読んだクレイグは、自分と同じ年ごろの少年がこのように殺されていったことに衝撃を受け、自分たちが何かをしなければと行動しはじめたのです。

クレイグは学校で同級生たちに訴えました。しかし多くは「関心がない」とか「子どもになんか何もできない」という反応でした。けれども少数ですが、クレイグに賛同してく

れる友達もいました。彼らは「子どもが子どもを解放する」という意味で、自分たちのグループを「フリー・ザ・チルドレン」と名付け、ガレージセールを行って資金を集めたり、労働組合の総会に出かけて行って協力を訴えたりと、その活動を始めたのです。

クレイグは、子どもたちの置かれている実態を調べなければ人々の心に訴えかけることはできないと考え、南アジアに旅をすることを決めます。しかし両親はそれを許可してくれません。クレイグはまだ12歳だったのですから当然です。しかし彼はあきらめることなく両親を説得し、頻繁に連絡を入れることを条件に、南アジアへの旅を認めさせたのです。

クレイグは自分の大切にしていた物や趣味で集めていた物を売ったり、廃品回収をしたりして資金を貯めていき、南アジアに向かいました。そして彼は、働かされている少年少女の実態を目の当たりにするのです。

タイでは、まるで商品を扱うように多くの少年や少女が売り買いされています。少年少女の売買春によって、エイズに感染することも少なくないのです。

パキスタンでは、「学校って何？　どんなところだい？」と、外の世界を知らずに一生レンガ作りをしなければならない少年と出会います。

インドの少女は、汚れた注射器からプラスチックの部分を取りはずす作業をして、わずかなお金を稼いでいます。麻薬患者や病人が使った注射器に触って針で指を刺してしまうことも多く、病気に感染する危険があります。

マザー・テレサの言葉です。「わたしたちのしている仕事は、イエスへの愛が行動となってあらわれたものにほかなりません。それは貧しい人のみじめな姿をとっておられるキリストへの心のごもった自由な奉仕なのです。一貧しい人々の中でも最も貧しい人であるキリストへの贈り物です」。

クレイグは、インドでマザー・テレサに会った時の様子を、次のように語っています。

「『僕は、働かされている子どもたちに会いに来ました。生活の様子や、僕たちにできることを知るために』。

『いいことね。貧しい人たちはいろいろなことを教えてくださいよ』。

『この問題を解決するには、世界中の子どもたちが参加しなくちゃならないんです』。

マザー・テレサはうなずいた。『あなたの話が聞けてうれしいわ。若い人たちが貧しい人を助けたいと思っていることをお知りになったら、神さまは喜ばれるでしょう』。

『お願いがあるんですけど』。僕はそっと、思っていたことを頼んでみた。『道ばたで生活して、毎日毎日働いている子どもたちのことも、お祈りの中に入れていただけませんか』。

彼女は僕を連れて、祈りの部屋の入り口へ行った。そこには黒板があって、「お祈りの内容」と書いてあった。マザー・テレサは僕にチョークを握らせた。僕は「働かされている子どもたちのために祈ってください」と書いた。マザーはにっこりとほほえんで僕を祝福し、修道女もここを訪れる人も、みんなお祈りの言葉の中にそういう子どもたちを入れてくれますよ、と言ってくれた。

僕の目は涙でいっぱいだった。彼女の優しい心と大きな魂に、僕は包み込まれた。僕の心は穏やかで、平和で満たされていた。マザーと会ったときのことを考えるといつも、その穏やかな気持ちが戻ってくる。

僕たちは、世界中のいろいろな問題について、自分にはどうしようもないと覚悟することが、よくあるよね。1人でやって効果があるのか、と思うことも多い。でも、マザー・テレサは効果があると言ったんだ。彼女の人生は、1人がやれば変わっていくということを、みんなに知らせてくれたんだよ」。

クレイグはこのインド滞在中に、インドを訪問していたクレティエン・カナダ首相に児童労働の問題を直訴しました。彼は首相に対して、「児童労働の問題を南アジアの首脳たちと話し合ってほしい」と訴えたのです。カナダ首相は、クレイグの訴えを首脳会談で取り上げることを約束しました。こうして1人の少年の行動が国際政治を動かしたのです。その後もクレイグは、「子どもが子どもの人権を守る運動」を続けています。

フリー・ザ・チルドレン、子どもの権利を守るために子どもが主体となって活動しているこのグループは、クレイグのカナダから始まって、現在では世界26か国に広がっています。彼らは、アジアやアフリカに約200の学校を建て、学用品や医療品を送っています。

日本でのフリー・ザ・チルドレンの働きが始まったのは、1999年からです。募金活動を行って、フィリピンにある性的虐待を受けた子どもたちを保護する施設「プレダ子どもの家」に乗合バスを贈ったり、モンゴルの子どもたちに学用品を送り続けています。

18歳になったクレイグが来日して、日本の高校生たちに講演をしました。それに対する高校生たちの声です。「行動力ってつくづく大切だと思う。12歳のとき、私はなにををしていたらいいか。たしかに、世界のいろいろなつらい仕事をしていたり、戦争に巻き込まれていたり、路上で暮らしていたり…という子どもたちのことを知って、悲しんだりしたことはあった。でも、そのために自分から何かをしたことはない。その前に面倒だとか、やっても無駄という気持ちが先立ってしまう、何に関しても。

だから、クレイグ君の話を知っていると、信じられない気さえした。『子どもにはムリ』と世間に勝手に決めつけられても、“苦しんでいる人を助けたい”と貫かれた信念は、確実に力となって世界を動かしている。それってとても心強い。あきらめないで思ったことを行動にすれば、やってやれないことはないんだ、と強く教えられた。

それにしても児童労働の現状のひどさには改めて驚く。訴えて殺された人がいるなんてことは全く知らなかった。ろくにお金をもらえず、危険な作業を長時間やらされるつらさというのは、たぶん私の想像を超えている。雇う人はお金もうけのためだろうか。その人たちはその人たちでまた、そういうことをしないと食べていけないのかもしれない。となると国全体の財政なども関係しているのか…。考えていくと、どんどん範囲が広がって難しくなってくる。大きな信念も、勇気も行動も、ろくにない私にはこの衝撃を忘れずに、たとえ受け身であっても協力するしかない。同世代の人が苦しんで、同世代の人が改善しようとしているのだから、私たちが協力しない手はないと思う」。

「現実にあるこのような問題に、多くの人が背を向けていると思う。私もその中の1人だと思っています。児童労働や児童売買春など、あってはならない問題に、私はただ『いけないことだ』とか『かわいそうだ』とか、そう思うだけでした。そう思うことで、自分はこの問題について、ちゃんと考えてるような気がしていました。でも、それは違っていました。それは、ただのきれいごとで、行動に移さないかぎり何の解決策にもなりません。クレイグさんの話を聞いて痛感しました。多くの人がそう思っているのではないのでしょうか。私たちがもしこの問題を本当に深く考え、行動していれば、少しでも世界を変えることができたのだと思います。クレイグさんは、わずか12歳で行動し、それが機になって今では10万人以上の子どもが参加する大運動になっているのです。

私は最初これを聞いたとき、驚きとショックがありました。自分1人ではできないと決めつけ、問題に見てみぬふりをしていました。その間にも多くの子どもが犠牲になっていることを知りながら。私は自分が情けないと思いました。それと同時に、自分ができることなら何でもしたい、そう思うようになりました。目の前にある問題に背を向けている人がいたら、問題に立ち向かってもらいたい、児童労働や児童売買春などをさせられているという事実を知らない人がいるなら教えてあげたい、私はそう考えています。もし、多くの人がこの問題に立ち向かえば、世界は少しずつ変わっていくと思うし、少しずつかもしれないけれど、解決していくのではないかと思います」。

日本でフリー・ザ・チルドレンの活動が始まった1999年の統計です。

ILO（国際労働機関）によると、世界中で14歳以下の働く子どもが2億5000万人いると言われています。そして毎日、新たに8万人以上の子どもが、過酷な児童労働を強いられています。

UNICEF（国連児童基金）の発表では、世界中の6歳から11歳の子どものうち、約4分の1が学校にまったく通うことなく生活しています。そのほとんどが、いわゆる発展途上国と言われる国々に住む子どもで、3分の2は女の子です。さらに、世界の紛争地域では、約25万人の子どもが兵士として軍隊で働いています。

エクパット「児童売買春・児童ポルノ及び性目的の児童売買を止めよ」という団体の発表では、世界で約200万人の子どもたちがセックス産業で強制的に働かされており、そのうちの半分がアジアの子どもたちです。そして毎年、何10億円という違法売上があるとされています。

クレイグやフリー・ザ・チルドレンが取り組んでいることは、子どもたちが生きる権利を保障され、学び、遊び、のびのびと生活できることです。そのためには、貧困、戦争、搾取、差別、売買春などの問題を取り除いていかなければなりません。これは途方もなく時間のかかることです。しかしその先にしか、本当の平和はないのです。

パウロはフィリピの教会の人々に向かって、「あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい」と言っています。

ここで「広い心」と訳されているギリシャ語は「エピエイケイア」で、聖書では他に「寛容」「柔和」「温和」などと訳されています。しかしこの「エピエイケイア」という言葉は、ギリシャ語以外のどんな言語にも、そのまま対応する訳語の見つからない言葉の1つだと言われています。

パウロは、この「エピエイケイア」こそがキリスト者の特徴であり、アイデンティティーでなければならないと言っているのです。

「エピエイケイア」とは、常識、規則、法、建て前といった事柄にしばられたり、しがみついたり、こだわったりすることなく、より良いものの実現のために、とりわけ愛のために、必要ならば常識、規則、法、建て前といった事柄から離れ、それを超越して行動していただく、柔軟で寛容な考え方や態度、姿勢を意味します。

それは、譲る心、負ける心、損をする心だといえます。自分を無にすること、打ち碎かれること、へりくだることです。

2章6～8節にはこうあります。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」。これがイエスの実践した「エピエイケイア」なのです。

イザヤ書57章14節以下(P. 1155)には、『へりくだる者の祝福』という見出しが付けられています。その15節にはこうあります。「高く、あがめられて、永遠にいまし その名を聖と唱えられる方がこう言われる。わたしは、高く、聖なる所に住み 打ち碎かれて、へりくだる霊の人と共にあり、へりくだる霊の人に命を得させ、打ち碎かれた心の人に命を得させる」。

パウロもまた、譲る心、負ける心、損をする心で、自分を無にすること、打ち碎かれること、へりくだることの先に平和の神が共にいることを告げています。

「優しい」という言葉、その漢字を分解してみましょう。「にんべん」をはずすと「憂い」という言葉になります。「憂い」というのは「悲しみ」ということです。その「憂い」の横に「にんべん」、すなわち「人」が立つのです。「憂い」の側に「人」が立つということが「優しい」ということです。すなわち、つらさ、悲しさ、痛みを持っている人に共感して、その傍らに立ってあげるということです。それが「優しい」人です。

フリー・ザ・チルドレンの働きは、クレイグの優しさから始まりました。南アジアの見知らぬ1人の少年の死。そこにあるつらさ、悲しさ、痛みの横に立ち上がったのです。

そして今、世界の26の国々で、10万人を超える子どもたちが、同じ憂い心を持って、たくさんの憂いの傍らに立っているのです。

神は私たちの憂いの傍らに立っていやしを与えてくれます。私たちもまた憂い心によって、つらさ、悲しさ、痛みを持っている人に共感して、その傍らに立つ者になりたいものです。